

5月8日 江口朴郎

©2022 YHAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所 湯川記念館史料室

報告「世界史の中の日本」(要旨)

日本の置かれている客観的な歴史的條件と、世界史の新しい段階に対処する主体的態度との問題が考えられるが、~~特~~ここでは、科学者の責任、国際的交流等の問題に進む前提として、特に後者の自主的主体的態度について考察することに重点を置く。

1 現在の世界史的條件の特質

——「平和」が~~重要な~~実践的な課題となること、即ち「平和」というような抽象的な命題~~によって~~^{によって}現実には大衆と組織~~を~~することが出来、そのような国家と直接関係のない大衆運動が国際政治の場に一定の影響を及ぼし、「平和」の維持に現実には貢献しているという事実は、歴史的には全く新しい段階と言い得る。その意味で、従来社会科学の前提となっている「階級」「民族」「国家」「思想的対立」等の概念を検討しなければならない。階級闘争、民族的国家的対立のあり方が、「人類」という課題の前に相対化される。(特に~~原子力~~原子力という如き科学技術の発展の条件がある場合)

——科学者、特に日本の社会科学者は、このような新しい歴史的條件に留意する必要がある。

2 アジア・アフリカ・~~ラテン~~アメリカ等は一面たしかに「後進的」な状況にあるが、それだけに、新しい世界史的條件に、~~抽象的な~~「理論」に依拠してではなく、言わば極めて即物的、自主的な態度で新しい課題

c092-006-011

に処理している。実際問題として、現在の世界の平和は、
コンゴやキューバに至るまでの諸民族の主体的な動きに支
えられている。「中ソ論争」と言われているような事実につ
いても、中国が現実は何を解決しようとしているかとい
う問題に即して考えらるべきである。

[3] 日本の立場

—— 史的に言えは、明治時代の日本の「近代化」
また日清、日露戦争の過程は、一面では、~~すばらしい~~ 世界
史の現実へのすぐれた対応の証を示していることになる
が、そのような現実に対処する主体的な態度はどうして
失われたか。現在の平和、また科学者の責任と論ある
場合に、~~必要~~ このよう（アジア特に中国との交流）な交
渉を促進することが重要と思われる。

（江口先生記）